

本校における基礎看護学実習Ⅱの実習報告

田 山 友 子

Key Words: 基礎看護学実習Ⅱ, 新カリキュラム

【要旨】 平成20年「保健師助産師看護師養成所指定規則」の改正が行われ、看護実践能力の強化を目指して益々臨地実習の充実が重要となっている。本校でも臨地実習の目的・目標、内容、看護技術到達目標、評価、記録等見直しを行った。そして、平成21年度より「基礎看護学実習Ⅰ」（1単位45時間）は、「看護活動の場・対象・役割を理解する」ことを目的に病棟で1年次後期に4日間実習を行っている。そして、これに続く「基礎看護学実習Ⅱ」（2単位90時間）は、2年次前期に2週間「健康障害を持つ人の看護と役割を理解する」を目的として実習を行っている。今回改正カリキュラム施行後5年目を迎え、基礎看護実習Ⅱについて実習報告をする。

I. はじめに

平成20年「保健師助産師看護師養成所指定規則」の改正が行われ、看護実践能力の強化を目指して益々臨地実習の充実が重要となっている。一方、近年の医療の高度化、在院日数の短縮、看護業務が多様化され、患者の医療安全に対する意識の向上や人権への配慮等、医療現場の変化に対応する必要がある。本校でも臨地実習の目的・目標、内容、看護技術到達目標、評価、記録等見直しを行った。基礎看護学実習Ⅰ（以後 基礎Ⅰ）は前期後期各1日計2日間の見学実習から病棟実習4日間に変更し、基礎看護学実習Ⅱ（以後 基礎Ⅱ）については実習期間の変更はないが目標の内容を一部変更し、看護実践能力向上を目指す内容とした。そして、平成21年度より基礎Ⅰ（1単位45時間）については「看護活動の場・対象・役割を理解する」を目的に看護の場を病院にしほり看護の基本を学ぶ。これに続く基礎Ⅱ（2単位90時間）は、2年次前期に2週間「健康障害を持つ人の看護と役割を理解する」を目的として、学生は初めて1人の患者を受け持ち実習に取り組む。今回改正カリキュラム施行後5年目を迎え、基礎看護実習Ⅱについて実習内容を報告する。

II. 基礎看護学実習Ⅱの概要

1. 基礎看護学実習Ⅱの位置づけ

カリキュラム改正により専門分野は専門分野Ⅰ・Ⅱとなり、基礎看護学は「専門分野Ⅰ」としてひとつの分野と位置付けられ、成人看護学、老年看護学、精神看護学、小児看護学、母性看護学などからは独立した。そして「専門分野Ⅰ」では、看護の概念をはじめとした基礎的理論や基礎的技術にフィジカルアセスメントやコミュニケーション論が加わり、看護師として看護実践判断の基礎的能力を強化する内容となった。そして、「専門分野Ⅰ」は「専門分野Ⅱ」「統合分野」の基盤となり、全ての看護実践の基盤となる内容を学ぶ分野である。「専門分野Ⅰ」の知識・技術の統合として1年次に基礎Ⅰ、2年次前期に基礎Ⅱの臨地実習を施している（表1参照）。

基礎Ⅰは、おもに看護活動の場や看護の役割・機能を知るために、病院見学や、副看護部長・看護師長の話を聞く。また、患者の日常生活のニーズを知

表1 基礎看護学実習の科目構成

基礎看護学実習	単位数	学年	前期/後期
I	1	1	後期
II	2	2	前期

り、看護を実践する素地を築くため、看護師とともに日常生活援助を行う。基礎Ⅱでは、成人または老年期にある対象の状態に応じた看護実践の基本について学習していく。受け持ち患者に対して、看護過程の思考プロセスに基づいて対象の理解に努め、日常生活に関する問題・課題を把握して、看護計画

に基づき実施し看護実践の基礎を学ぶ。

2. 実習目的・目標 (表2参照)

1) 目的

目的は、「健康障害を持つ人の看護と役割を理解する」である。基礎Ⅱでは、基礎Ⅰの学びと経験、校内で学んだ知識や技術を統合させて実習に取り組

表2 実習目的・目標

<p><目的>健康障害を持つ人の看護と役割を理解する。</p> <p><目標></p> <p>I. 健康障害を持つ人の状況に応じ、基本的欲求充足への看護を理解する。</p> <p>1. アセスメントする。</p> <p>1) 情報源の種類を理解し、情報を収集する。</p> <p>2) 病歴、家族構成に関する情報収集をする。</p> <p>3) 基本的欲求の小項目毎に情報収集する。</p> <p>4) 情報の意味を基礎知識に基づき分析・解釈する。</p> <p>5) 基本的欲求の小項目の充足状況に判断基準に基づき査定する。</p> <p>6) 基本的欲求の小項目毎の充足状況について関連性を判断し、統合する。</p> <p>2. 問題・課題を明確にする。</p> <p>1) 未充足及び未充足の恐れが予測される基本的欲求を、問題としてリストアップする。</p> <p>2) 基本的欲求は充足しているが、より良い健康状態を望める状況を課題としてリストアップする。</p> <p>3) 問題・課題の優先順位の決定をする。</p> <p>3. 計画を立案する。</p> <p>1) 到達目標を設定する。</p> <p>2) 問題・課題毎に目標を設定する。</p> <p>3) 問題・課題毎に観察計画、ケア計画、教育計画の具体策を立案する。</p> <p>4. 実施する。</p> <p>1) 立案した計画とその時の患者状況に基づいて実施し、主観的・客観的情報を収集する。</p> <p>2) 収集した主観的・客観的情報から、問題・課題の変化や今後の見通し、援助の有効性を査定し、計画の継続や追加修正をする。(実施後の評価)</p> <p>II. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じて基本となる技術・日常生活行動の援助技術を安全・安楽に実施する。</p> <p>III. コミュニケーションの意義を理解する。</p> <p>1. 相手のことを知りたい、理解したいと思う気持ちを持つ。</p> <p>2. 対人関係において自分自身を知ることの必要性について気づく。</p> <p>3. 相手の感じていることや考えていることを知ろうとする。</p> <p>4. 自分が感じていることや考えていることを表現する。</p> <p>IV. 看護の目的と役割を理解する。</p> <p>1. 知識と体験を結びつけ、看護の目的と役割を考える。</p> <p>2. 看護者としての倫理観を養う。</p> <p>V. 学習方法を理解し、実習環境に適応する。</p> <p>1. 計画的に学習する。</p> <p>1) 実習の目的・目標をよく理解する。</p> <p>2) 自分自身の学習計画を立て、学習する。</p> <p>3) 事前学習を積極的に行う。</p> <p>4) 実習の場で学んだことを明らかにし、目的・目標と照らし合わせて評価する。</p> <p>2. 問題解決型の学習をする。</p> <p>1) 疑問点はそのままにせず、追及して学習する。</p> <p>2) 学内での学習をフィードバックしてみる。</p> <p>3) カンファレンスやグループ学習の場を活用して、学習を深める。</p> <p>3. 実習グループを育て、互いに高め合う。</p> <p>1) 連絡を取り合い、互いに助け、協力し合う。</p> <p>2) チームワークを大切にし、リーダーシップ・メンバーシップを養う。</p> <p>4. 実習生としてのマナーを守る。</p>

む。学生は1名の患者を受け持ち、「健康障害を持つ人」であることをふまえ、対象の基本的欲求を充足させるために基本的な技術と日常生活援助を実施する。また、患者の健康障害に伴う問題を解決する思考のプロセスとして看護過程を用いる。

2) 目標

本校の教育目標の5本柱である「人間」「看護の役割」「人間関係」「看護実践」「学習方法」に基づき実習目標も「対象理解」「看護技術」「コミュニケーション」「看護の役割」「学習方法」の5本柱で目標を立てている。カリキュラム改正に伴い「目標Ⅰ健康障害を持つ人の状況に応じ、基本的欲求充足への看護を理解する」と「目標Ⅲ コミュニケーションの意義を理解する」について追加修正を行った。目標Ⅰについては看護過程の計画立案と実施を加えた。評価については実施の記録をSOAPで記載することでよしとし、あえて項目立てはしなかった。目標Ⅲについては相手に対する関心だけではなく、「対人関係において自分自身を知ることの必要性を理解する」「相手の感じていることや考えていることを知ろうとする」「自分が感じていることや考えていることを表現する」を加えた。

3. 対象学生 看護専門学校3年課程
2学年 86名

2年次前期でコミュニケーション論以外の基礎看護学（看護学概論、看護技術Ⅰ・Ⅱ、看護過程、フィ

ジカルアセスメント）は既習している。尚、コミュニケーションの基本的技術については看護技術Ⅰで既習している。

4. 実習場所 A 大学病院 10箇所の病棟
1グループ 8～9人。

5. 実習ガイダンス（表3参照）

学生にとっては2回目の実習となり、基礎看護学実習Ⅱで基本的な実習態度を身につけていく。そのため、実習に向けての実習ガイダンスは7回（1回90分）実施している。まず、全体ガイダンスでは、学生が臨地実習にむけての心構えができるように、最初に実習調整者から実習の意義と方法、看護職倫理、インシデント対応、実習記録類の取り扱い等を実施している。その後、科目責任者から実習の展開について目的目標、展開方法など、学生がイメージ化して自ら行動できるように努めている。次に各グループガイダンスについて、各教員は学生に病棟の概要や各病棟の疾患・看護の特殊性、1週間のスケジュール、実習の進め方、物品等、各病棟の状況も踏まえてガイダンスを行う。各教員は各病棟の指導者と事前打ち合わせを行いガイダンスに望む。

6. 2週間の実習（時間割）（表4参照）

病棟実習時間は、初日のみ9:00～16:00であるが、基本的に8:00～15:00である。

初日は病棟オリエンテーションから始まり、受け持ち患者決定、患者紹介、情報収集を予定している。

表3 実習ガイダンス

回（日時）	内容	担当者	
1 2 3 4 5	1. 臨地実習について ・臨地実習の意義と方法 ・インシデントレポート 2. 基礎看護実習の展開 ・目的、目標の確認 ・事前学習内容 ・「秘密保持に関する誓約書」 ・実習展開方法 ・まとめと評価 ・グループ役割分担 ・実習前アンケート ・行動目標、計画の立て方 ・マナーと身だしなみ	実習調整者 科目責任者	【配布物】 ・2年次実習ガイドブック ・秘密保持に関する誓約書 【持参するもの】 ・印鑑
6	病院ロッカー確認	科目責任者	
7	3. グループ担当教員との打ち合わせ	担当教員	【持参するもの】 ・2年次実習ガイドブック ・担当教員に確認
8～13	実習のまとめ	担当教員 科目責任者	

表4 実習展開

週	日	7/14(月)	7/15(火)	7/16(水)	7/17(木)	7/18(金)
1週目	午前	学 内 授 業	学 内 授 業	9:00~16:00 病棟オリエンテーション	8:00~15:00 情報収集 援助の見学・実施	8:00~11:30 情報収集 援助の見学・実施
	午後			受け持ち患者決定 情報収集, 患者紹介	援助の見学・実施 バイタルサイン測定 の見学または実施	13:00~15:00 (学内実習) 記録指導
	提出物			※行動計画表	※今日の記録① 1号紙	※今日の記録② 2号紙
	15:00~16:00 学習の整理 行動計画の作成等			14:00~15:00 学習の整理 感想・質問など		
週	日	7/21(月)	7/22(火)	7/23(水)	7/24(木)	7/25(金)
2週目	午前	海の日	8:00~15:00 援助の見学・実施	8:00~15:00 援助の実施	8:00~15:00 援助の実施	8:00~15:00 援助の実施
	午後		↓	↓	↓	↓
	提出物		※今日の記録③ 2号紙再 3号紙	※今日の記録④ 4号紙	※今日の記録⑤ 4号紙再	※5号紙① (関連の4号紙添えて)
14:00~15:00 学習の整理	14:00~15:00 カンファレンス 「看護計画について」	14:00~15:00 学習の整理	14:00~15:00 学習の整理	14:00~15:00 学習の整理		
週	日	7/28(月)	7/29(火)	7/30(水)	7/31(木)	8/1(金)
3週目	午前	8:00~15:00 援助の実施	9:00~16:00 学内実習	9:00~12:10 学内実習 全体のまとめ	学 内 授 業	
	午後	↓	記録のまとめ 個人面接 他	↓		
	提出物	※5号紙② (関連の4号紙添えて)	5号紙③			
13:30~15:00 最終カンファレンス 「2週間の学びと今後の課題」						

2日目以降は患者の治療計画や病状にあわせて行動計画を立案していく。受け持ち患者については、選択の基準(表5参照)を決めている。受け持ち患者の決定に際しては、各病棟の指導者が実習の趣旨を理解し事前に患者に声かけを行うなど、指導者の尽力に負うところが大きい。

日々の行動計画は基礎Ⅱから学生自身で立案している。行動計画を調整することで患者、疾患理解につながりより個別性のあるケアが思考できるようになる。

毎日14時以降の1時間は、1日の振り返りと次の日に向けての準備のために学習の振り返りを行

表5 患者選択の基準

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 2週間で1~2名, 継続して受け持ちができること 2) 言語的コミュニケーションが可能であること 3) 日常生活援助があることが望ましい 4) 複雑な疾患でなく, 合併症が少ないこと |
|---|

う。また、2週間の実習の間に実習3日目と最終日は学内日を設けている。実習3日目は受け持ち患者が決まり、患者の情報がある程度把握できるため、学内で情報の整理と患者の理解を深めるように担当教員は各学生に対応する。そして、最終日は個人面談をして実習の振り返りと課題レポートに取り組

み、各自が看護の役割について体験をもとに考察する。

カンファレンスについては3回程度計画しているが、基礎Ⅱは教員が企画運営を行う。3回のうち1回は病棟実習において不足している看護技術を経験することを目標としている。これは看護技術として経験することは重要であるが経験する機会がすくない項目や各病棟の特徴を生かしてその病棟でしか学べない技術項目を学ぶようにしている。

III. 実習展開の実際

1. 目標Ⅰ「健康障害を持つ人の状況に応じ、基本的欲求充足への看護を理解する」

下位目標は看護過程の構成要素別に設定している。学生は初めて本格的に1人の患者を受け持ち看護過程を活用しながら患者理解を深め、患者にどのようなニーズがあるのか、どのような看護介入が必要なのか明らかにして、個別性を考慮することや、状況判断をする能力を養う。本校における看護過程は、アセスメント・問題課題の明確化・計画・実施・評価から成り立っている。2年前期に看護過程の講義で看護過程の概念と展開の基本を学び、今回初めて実習で看護展開することを考慮し、基礎Ⅱでは看護過程のアセスメント、問題の明確化に重点を置

き、計画、実施については助言を受けながら展開してみるレベルとしている。

入院期間の短縮化に伴い病棟実習前や初日で受け持ち患者が必ずしも決定することはできない。また、選択の基準（表5参照）のとりの患者を受け持てるとは限らないのが現状である。そのため、実習2日目までに決定できるように努力をした。2日目に受け持ち患者が決定する学生には、1日目は病棟に適應することと受け持ち予定の入院患者の疾患理解、入院時の看護について学びを深めた。そして、実習2日目が終了する時点では全学生の受け持ち患者が決定し、年齢、性別、疾患、検査データ、治療内容、ADL等の情報がある程度把握できることを目指した。家族背景や社会的な役割などは、ある程度人間関係が築かれないと把握できないため、把握した段階でアセスメントを行っていった。

実習3日目は1日学内で思考の整理をして患者理解を深めた。学生は事前に病歴・家族構成の情報、基本的欲求の小項目ごとに情報を整理してある程度分析解釈した。その時学生は情報の意味を基礎知識に基づき分析解釈することが求められるが、平成24年度の基礎Ⅱ後の看護過程の自己評価において4割の学生が不十分だったと回答していた¹⁾ことから、知識や経験の少ない学生にとっては、情報の意

表6 看護技術に関する病院との取り決め事項

<p>1. 看護技術の実施について</p> <p>1) 注射について 患者への実施は、原則として行ってはならない。 教員または看護師の指示・監督のもと東京医科大学病院看護手順に則り、準備・後始末を行うことは許可する。実施場面は見学までとする。</p> <p>2) 採血について 患者への実施は、原則として行ってはならない。 教員または看護師の指示・監督のもと東京医科大学病院看護手順に則り、準備・後始末を行うことは許可する。実施場面は見学までとする。 ただし、簡易血糖測定に関しては、事前に患者の同意が得られており、1回以上看護師が実施する場面を見学していて、看護師の監督のもとであれば、2年次の成人看護学実習Ⅰ以降実施してもよい。</p> <p>3) 浣腸・導尿について 患者への実施は、原則として行ってはならない。 教員または看護師の指示・監督のもと東京医科大学病院看護手順に則り、準備・後始末を行うことは許可する。実施場面は見学までとする。</p> <p>4) 看護記録について 病院の看護記録への記載は、原則として行わない。 学生は、学校指定の記録用紙に記入する。病院の看護記録は患者の情報源として活用し、患者の看護に役立てる。</p>
--

味と基礎知識を結びつけることや分析解釈に助言が必要と考えた。そのため、教員は学生の思考を考慮しながら、予測的な視点も助言するなどしてアセスメントが深められるようにしていった。そして、問題課題の明確化にむけて思考ができるようにした。

4日目は、問題課題としてリストアップされたものについて臨床指導者に助言をもらいながら問題課題の明確化をしていった。また、日常生活援助やコミュニケーションをとり、明らかになった問題課題について患者はどのようなニーズがあり、どのようなケアが必要なのかを考えていく1日とした。そして、4日目の実習はその後に土日をはさむため、計画立案ができるように方向付けができていくかまで確認した。

2週目は患者理解を深めながら、立案した計画に基づき看護ケアを実施していった。しかし、患者の回復過程が早く、学生の立案した計画が後追いになることも多々あり、また受け持ち患者が退院し、2人目の受け持ち患者を選択することもあった。基礎IIでは、学生の思考にあわせて振り返ることが重要と考える。日々の状態変化や実施後の反応をうけてアセスメントをしながら修正していく展開する過程が重要であることを理解できるように支援していった。

教員は、患者への看護が適切かどうかについて指摘・修正しがちであるが、学生自らが抱いた疑問課題に対して、学生が課題を教員から指示されているからと捉えている場合には、学習意欲にはつながらない²⁾と岡田は指摘している。可能な範囲で学生の関心事に注目して見守りをしていくことが必要であった。

2. 目標II 「原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じて基本となる技術・日常生活行動の援助技術を安全・安楽に実施する」

看護技術は、カリキュラム改正に伴い「卒業時の看護技術到達度」が明確化されたため、3年間の全実習について看護技術チェックリスト(表7参照)を見直し、できるだけ学生が行動化できるような表現とした。看護技術チェックリストは到達目標を見学・模倣・コントロールの3段階に設定し学習進度に合わせて技術の経験や獲得ができるようにした。

近年の医療の高度化、在院日数の短縮に伴い、日常生活援助についても経験する機会が少なくなっている。その上、有資格者でない看護学生が安全

に実施できるように環境を整えていく必要がある。本校では、患者の安全確保の観点から、看護技術について病院との取り決め事項(表6参照)を設けている。また、臨地実習で1回1回のケアを安全・安楽に実施することができるように、実習前の学習として各病棟の特徴を踏まえて、日常生活援助の練習を計画し各担当の教員も関わりながら練習して実習に臨んだ。

そして、基礎看護学実習では、基本となる技術、日常生活行動の援助技術を重点的に経験できるように、基礎I・IIの技術チェックリストは同じ項目とした。ただし、学生の成長にあわせて到達目標のコントロール項目を基礎IIは多くした。技術項目については、手術後であっても早期離床に伴い早い段階でシャワー浴を行えるなど自立度の高い患者が多いため、清潔援助については12項目の中で1項目できることを必須とした(表7参照)。

基礎IIの看護技術実施状況(図1参照)は、スタンダードプリコーションを初め必須項目である10項目はほとんどの学生が経験することができていた。反対に経験が少ない項目は消毒液の作成であった。今後、必須項目の検討をしていくとともに、学生にも実習期間を有効に活用できるよう意識づけていきたい。限られた経験を十分に生かすためには、体験したことを振り返り意味づけをすることと学生同士の経験の共有を行う機会をもつことが重要となる。援助直後や日々の振り返りの時間を生かして教員・指導者とともに体験したことの意味づけを行ったが今後も強化していきたい。また、先行研究より看護援助の実際場面では「排泄の援助のおむつ交換と排泄物の観察」「車椅子援助」「清潔援助の湯温」について困難さを感じている、その原因は「注意力不足」が最も多い³⁾とある。学生は、実習に対して緊張感が強く注意不足になりやすい。今後も継続して患者の安全確保の観点から看護技術について病院との取り決め事項(表6)の徹底と基礎看護実習では教員・指導者等とともに援助を行っていくことを徹底していきたい。教員は看護援助の善し悪しの評価だけでなく、学生がどのようにとらえているか確認していく必要がある。

3. 目標III 「コミュニケーションの意義を理解する」

コミュニケーションは、看護の対象である人間とその健康について関心を持つことが前提として重要

表7 看護技術チェックリスト

分類	看護技術	必須	到達目標		見学	実施
			知識・理解	技能		
基本となる技術	1) スタンダードプリコーションに基づく手洗い	*	●	●		
	2) 消毒剤の作成	*	●	●		
	3) 使用した物品の感染防止の取扱い	*	●	●		
	4) インジェクト・アンプル・注射器の速やかな報告方法の理解					
	5) 災害発生時の指示に従った対応方法の理解					
	6) 患者の搬送・行動特性に合わせた原簿管理の取扱い					
	7) 感染源に使用した物品・器具の取扱い					
	8) 患者の搬送・行動特性に合わせた転倒・転落・転倒予防					
	9) 必要に応じて用紙(手帳・ゴグル・ガウン)の装着					
	10) 放射線防護					
	11) 患者転倒防止策 患者搬送のストレープ、ネームレートの確認	*	●	●		
	12) 一般火災の避難	*	●	●		
	13) ベイタルサイン測定	*	●	●		
	14) 状態に応じた体温測定(発熱・発汗・寒戦等の観察)					
	15) 末梢循環促進のための部分浴・電圧・マッサージ					
16) 肩部の取替						
17) 身体の特徴(身長・体重など)						
18) 看護記録の種類と内容	*	●	●			
19) 看護記録への報告	*	●	●			
20) 看護記録						
21) 入院歴からエンターゼーション						
22) 通院指導						
23) 褥瘡予防	*	●	●			
24) ベッドメーカー	*	●	●			
25) 感染の発熱と体位の上止						
26) 褥瘡予防						
27) ベッドから車椅子への移乗						
28) 歩行・移動介助						
29) 安静状態・体動制限による苦痛緩和の援助 リラクゼーション						
30) 睡眠のアセスメント 基本的入眠を促す援助						
31) 閉鎖・下痢	*	●	●			
32) 摂取状況(方法・量など)のアセスメント						
33) 栄養状態のアセスメント						
34) 電解質データの把握						
35) 食生活の把握						
36) 自然排便 排便を促す援助						
37) 床上排便・ポータルトイレ介助						
38) 口腔ケア(嚥下を含む)						
39) 耳・鼻の清潔						
40) 手洗・足浴						
41) 爪切り						
42) 歯部の清潔保持						
43) 臥床患者の清潔						
44) 部分着脱(背臥位)						
45) 清潔(嚥下を含む)						
46) 臥床患者の清潔						
47) 洗濯(嚥下を含む)						
48) 身体しなみを養える運動(ストレッチ・マッサージ)						
49) 入浴の準備・介助・入浴前からの観察						
50) 緊急時の応急処置方法の把握						
その他						

基礎看護学実習Ⅱ 看護技術チェックリスト

基礎看護学実習Ⅱ 看護技術チェックリスト

学籍番号 学生氏名

このチェックリストは、基礎看護学実習Ⅱにおいて経験してほしい看護技術項目と到達レベルを示しています。以下のガイドに従って使用し、看護技術の向上をめざしましょう。

<活用ガイド>

- 1 到達目標を三段階で設定し、●印で示しています。
第1段階：見学
第2段階：模倣(観察したことや知識を想起しながら行動してみるレベル)
第3段階：模倣(手帳・コントロール)に従って、ある程度自分で操作して実施できるレベル)
- 2 実習前に到達目標を参照し、計画的に事前学習を行った上で実習に臨みましょう。
- 3 実習途中や実習後に到達目標を参照しながら、「見学」や「実施」欄に○をつけ、指定された時に担当教員や科目責任者に提出してください。
- 4 必ず経験してほしい項目は、必須項目として*で示しています。

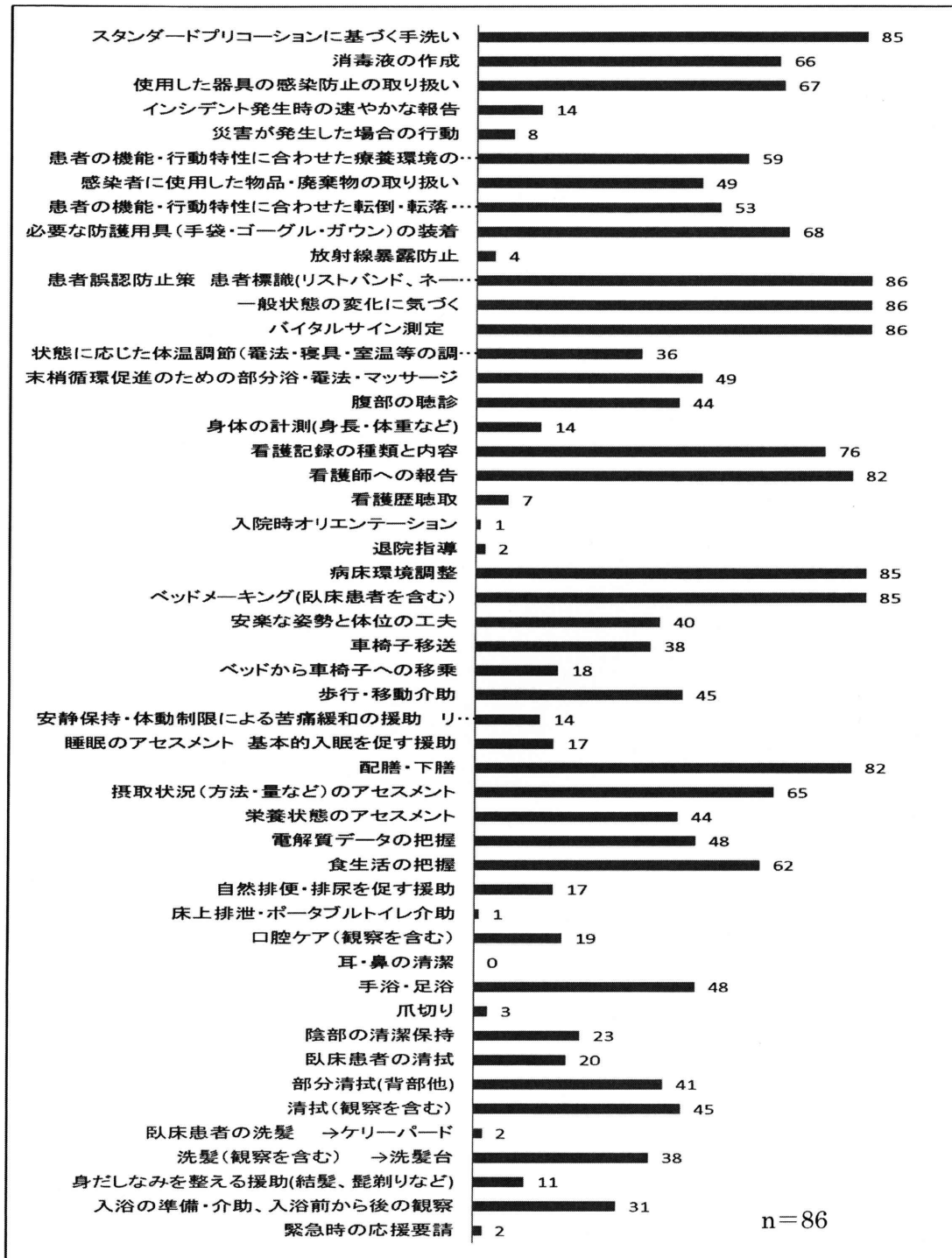


図1 看護技術実施状況

である。その上で他者理解、共感的理解、自己理解を深めていけるように具体的な表現で下位目標をあげた。そして、コミュニケーションの対象は患者だけでなく、病棟関係者やグループメンバー等も含まれている。

カリキュラム改正にともない、基礎Iを病棟実習4日間に変更したことから、学生は患者に対するイ

メージ化はできている。しかし、学生にとっては、初めて患者を受け持つため、患者との円滑な人間関係が得られるのか心配する学生は多く、緊張感が高い。実習初日は教員・指導者ともに患者と学生の関係づくりができるように、看護援助を通してコミュニケーションを促すなど支援をした。

学生はコミュニケーションの目標達成状況について

て「相手のことを知りたい, 理解したいという気持ちをもつ」「相手の感じていることや考えていることを知ろうとする」ことについては自己評価が高く, 「対人関係において自分自身を知ることの必要性に気づく」「自分の感じていることや考えていることを表現する」については, 先行研究において自己評価が少し下がっていた⁴⁾. この状況は本年度も同じ傾向であった. 学生は患者のことを知り患者のために役に立ちたいという意識は高く, 患者に関心をよせて患者の話を傾聴し理解しようと努めていた. その姿は看護師を目指すものとして重要と考える. しかし, 学生の中には自己の思考や感情の表現が上手ではない学生もいた. 教員・指導者の意図的な質問によって学生の考えを引き出すかわりをしていたが十分とはいえなかった. また, カリキュラム上コミュニケーションの基本的技術は学んでいるが, コミュニケーション論はまだ未習であることの影響も考えられた.

そして, コミュニケーションは患者との関係ばかりではなく, グループでの活動, 医療関係者との連携の中で重要となる. 日々の連絡・報告, 自分の意見をいろいろな場面で求められる. 臨地実習における不安内容について, 岡本らは, 学生は看護師や他の医療スタッフ, グループ学生とうまくやれるか等実習中の困難さを支配しているのはコミュニケーションであると意識している⁵⁾と述べている. 教員・指導者は, その点を踏まえて定期的に連絡報告をするような決まりごとを設定するだけでなく, 適宜連絡報告時に質問をして学生が自己表現できる場を設定やできているかの確認をする必要があった.

4. 目標 IV 看護の目的と役割を理解する.

看護の目的と役割は, 学んできた知識と自分の体験を通して看護の役割についてレポートとしてまとめることを課題とした. 看護の目的と役割は大きな概念であり, いろいろな要素が含まれ表現の仕方も多様である. 学生は体験をした具体的な場面から多くの学びを得て, 自立に向けた見守りの援助の必要性や手術後の予測的なかかわりの必要性, 観察やニーズの把握の必要性, 個別性のある看護についてなど, 患者とのかかわりをとおして看護の目的や役割を表現していた.

しかし, 学生の中には文章化が難しく, 箇条書きに近いかたちでまとめてきている学生もいて, 学生が自分の感じていることや考えていることをうまく

表現しきれていないことがあった. また, 看護の役割について気づいていない学生もいた. 日々の実習の中で看護の目的や役割について実感できるように, 看護援助直後などに患者の健康上の問題課題からどのようなニーズがあり, 看護師としてどのようにかかわるの必要があり, 実施後どのような変化があったのかなど, 看護場面を振り返り支援を強化していく必要があった.

2週間の実習を通して看護者としての倫理観については, 実習ガイダンス時に臨地実習病院で掲げている「患者の人権」について確認をするとともに, 実習にむけて契約書と同意書の内容を学生自身が熟読をして署名をした. また, 受け持ち患者との同意書を交わすときに内容を読み上げ実習依頼をすることで, 学生の責任ある行動につながっていたと考える.

5. 目標 V 「学習方法を理解し, 実習環境に適応する」

本校の教育理念は自主自学であり, 学習はカリキュラムに関わるキーワードでもあり, 学習方法について目標を掲げている. 学生が主体的に学習できるように計画的に問題解決型の学習やグループダイナミックス, 学習者としてのマナーについて具体的な下位目標をあげた. また, 計画的に学習ができるように, 実習ガイダンスは病棟実習が始まる1ヵ月前より実施した. 初回のガイダンスで実習グループの配置を提示するため, 実習病棟やグループメンバーが明らかとなり, 学習計画を立てやすい. また, 本校では病棟オリエンテーション内容についてファイル化し, いつでも学生が自主的に病棟の特徴や看護体制等についての情報を得ることができるようにした. また事前勉強をしやすいように事前課題の提示や校内実習室を自由に活用できるように環境を整えた.

問題解決型の学習については, 疑問点はそのままにしないように, 日々の行動計画調整や学習の整理の時間を有効に活用することを提案しているが個人差があった. 学生の中には「何をどこまで勉強すればよいかわからない」と表現する学生もいた. 初めて患者を受け持ち本格的な実習であるため, 個々の学生に対して実習の仕方から具体的に指導する必要があり, 今後も継続していく.

カンファレンスについては, 基礎 II は教員が計画し実施していく. そのため, カンファレンス実施

に向けて意義の説明, 共有学習の重要性も強調しながら実施した。

実習グループを育て, 互いに高めあうことについては, グループの中でリーダー, サブリーダー, カンファレンス係, 備品係, クリーニング係, 提出物係等の役割を決めて各学生が役割を遂行していくようにした。また, 教員や指導者が連絡したいことなどは, 1人の学生に伝えれば全学生に連絡がいくように学生に声かけをしてグループが育つようにかかわった。

学習者としてのマナーについては, 一部の学生は日ごろの言葉遣いや行動, 基本的な常識に欠ける学生もおり, その都度個々に対応した。日ごろからの身だしなみやマナーの大切さを今後も指導していく。

IV. 実習の評価とまとめ

学生の自己評価(表8参照)と教員評価(表9参照)を行った。各学生の実習のまとめとして各教員と面接時に, 学生の自己評価を活用し実習の振り返りを行った。ここでは, 学生自身が自分の傾向性を理解して次の実習に向けて課題を明らかにすることを大切にしている。その後, 全体の実習まとめとして各グループで各病棟の特徴を踏まえての学びをまとめ, 各グループ発表し学びの共有を行った。教員評価は, 教員と病棟の指導者とともに評価をした。

V. 今後の課題

改正カリキュラム後看護実践能力の向上を目指し, 基礎IIについて「目標I 健康障害を持つ人の状況に応じ, 基本的欲求充足への看護を理解する」と「目標III コミュニケーションの意義を理解する」について追加修正をした。目標Iについては看護過程の計画立案と実施を加え, 目標IIIについては相手に対する関心だけではなく, 自己理解, 共感的理解, 他者理解を加えた。実施して5年がたち振り返ることで, 今後の課題も明らかにすることができた。

今後の課題としては,

1. 看護過程について学生の思考を促進できるように, 教員・指導者は患者への看護の適切性に焦点をあてて指摘修正しすぎない。

2. 看護技術については今後も経験ができるように技術項目の検討をして環境を整える, そして経験した看護技術の意味づけを行い効果的な技術習得にむけていく。
3. コミュニケーションについては, 学生の不安に気づき自己表現する力をつけるように働きかけをする。
4. 看護の役割について, 看護場面の振り返りを細やかにを行い学生が気づけるように支援をしていく。
5. 学習方法について, 学生の個別性にあわせて実習の仕方から具体的に指導していく。
6. 学生個々の能力の差が大きいので, 臨地の指導者と連絡を密に取り, 学生の個別性にあわせた関わりをしていく。

来年度で最後の実習となるが, 上記課題を踏まえて取り組んでいきたい。

引用・参考文献

- 1) 山内麻江, 折元美雪. 看護過程の授業考察—基礎看護学実習II終了後の看護過程の行動目標に対する自己評価より—. 東京医科大学看護専門学校紀要. **22**(1), 43-55, 2012.
- 2) 岡田初恵, 榎本朋子. 基礎看護学実習IIにおける実習過程に伴う看護学生の思い—達成動機が高まった学生を対象とした調査から—. 川崎医療短期大学紀要. **31**, 7-13, 2011.
- 3) 杉本幸枝, 土井英子. 基礎看護学実習IIにおける学生の日常生活援助技術の困難さの分析. 新見公立短期大学紀要. **29**(2), 19-24, 2009.
- 4) 冬木佳代子. 学生の自己評価からみた基礎看護学実習IIの目標達成状況. 東京医科大学看護専門学校. **21**(1), 31-41, 2011.
- 5) 岡本清美, 内海滉. 臨地実習における不安内容とその変化—基礎看護学実習IIの不安内容と因子構造—. 日本応用心理学会大会発表論文集. **68**, 55, 2001.
- 6) 鷹居樹八子, 弓削なぎさ(他). 基礎看護学実習における看護・援助技術に関する認識の変化からみた実習目標の達成状況. 産業医科大学雑誌. **34**(2), 207-216, 2012.
- 7) 藤吉恵美, 小林貴子(他). 基礎看護学実習における学生カンファレンス記録からみたカンファレンスの評価と課題. 岐阜医療科学大学紀要. **4**, 73-78, 2010.
- 8) 矢野章永. 看護学教育臨地実習指導者実践ガイド. 医歯薬出版株式会社, 2012.

表8 自己評価

基礎看護学実習Ⅱ自己評価表

<自己評価表のねらい>

- ①実習目標の達成に役立つ。
- ②自己評価能力を養い、継続学習に役立てる。

<自己評価表の使い方>

- ①実習開始時に評価内容・評定・評価基準を確認し、目標達成を目指す。
- ②実習終了時、評価基準を参考にし評定(A~Dのいずれか)に○をつける。
- ③実習終了時、全体的な総評を記載し、次の科目で学びたいことや自己の課題を明確にする。
- ④実習終了時、担当教員に提示し、評価・助言を求める。
- ⑤実習終了時、次の担当教員に自己評価表を活用して学びたいことを報告し、具体的に学習計画を立案する

実習場所 _____

学籍番号 _____ 学生氏名 _____

担当教員 _____

評価内容		評定	評価基準
目標Ⅰ. 健康障害を持つ人の状況に応じ、基本的欲求充足への看護を理解する。			
1. アセスメント	1)情報源の種類を理解し、情報を収集する 2)病歴、家族構成に関する情報収集する 3)基本的欲求の小項目毎に情報収集する 4)情報の意味を基礎知識に基づき分析・解釈する 5)基本的欲求の小項目の充足状況に判断基準に基づき査定する 6)基本的欲求の小項目毎の充足状況について関連性を判断し、統合する	A B C D	A できる B 大体できる C 指導を受けてできる D 指導を受けてもできない
2. 問題・課題の明確化	1)未充足及び未充足の恐れが予測される基本的欲求を、問題としてリストアップする 2)基本的欲求は充足しているが、より良い健康状態を望める状況を課題としてリストアップする 3)問題・課題の優先順位の決定をする	A B C D	
3. 計画立案	1)到達目標を設定する 2)問題・課題毎に目標を設定する 3)問題・課題毎に観察計画、ケア計画、教育計画の具体策を立案する	A B C D	
4. 実施	1)立案した計画とその時の患者状況に基づいて実施し、主観的・客観的情報を収集する 2)収集した主観的・客観的情報から問題・課題の変化や今後の見通し、援助の有効性を査定し、計画の継続や追加修正をする(実施後の評価)	A B C D	
目標Ⅱ. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じて基本となる技術・日常生活行動の援助技術を安全・安楽に実施する		A B C D	A 対象の状況に応じて、原理・原則を想起し、安全安楽に実施できる B 原理・原則を想起し、指導を受けながら安全・安楽に実施できる C 指導により原理・原則を想起し、指導を受けながら安全・安楽に実施できる D 指導を受けても原理・原則の理解が曖昧で実施できない
目標Ⅲ. コミュニケーションの意義を理解し、対象に合わせたコミュニケーションをとる。			
1. 相手のことを知りたい、理解したいと思う気持ちを持つ		A B C D	A コミュニケーションの意義が理解できる B コミュニケーションの意義が大体理解できる C コミュニケーションの意義が理解が浅い D 指導を受けてもコミュニケーションの意義が理解できない
2. 対人関係において自分自身を知ることの必要性について気づく		A B C D	
3. 相手の感じていることや考えていることを知ろうとする		A B C D	
4. 自分が感じていることや考えていることを表現する		A B C D	
目標Ⅳ. 看護の目的・役割を理解する。			
1. 知識と体験を結びつけ、看護の目的・役割を理解する		A B C D	A 知識と体験を結びつけて看護の目的・役割について理解できる B 知識と体験を結びつけて看護の目的・役割を大体理解できる C 知識と体験を結び付けようとしているが、看護の目的・役割の理解が浅い D 知識を想起できず、知識と体験を結びつけられず、看護の目的・役割を理解できない
2. 看護者としての倫理観を養う	合格 不合格		合格:倫理的言動がとれている 不合格:指導を受けても倫理的言動がとれない
目標Ⅴ. 学習方法を習得し、実習環境に適応する			
1. 計画的に学習する		A B C D	A 効果的学習行動がとれ、看護に活かせる B 効果的学習行動がとれ、指導により看護に活かせる C 指導により学習行動をとり、指導により看護に活かせる D 指導を受けても学習行動がとれず、看護に活かさない
2. 問題解決型の学習をする		A B C D	
3. 実習グループを育て、互いに高め合う		A B C D	A 効果的グループ学習につながる役割行動がとれる B 効果的グループ学習につながる役割行動が大体とれる C 指導により効果的グループ学習につながる役割行動がとれる D 指導を受けても効果的グループ学習につながる役割行動がとれない
4. 実習生としてのマナーを守る	合格 不合格		合格:マナーを守ることができる 不合格:指導を受けてもマナーを守ることができない
【全体的な自己評価、次回学びたいこと、今後の課題】			

表9 教員評価
東京医科大学看護専門学校
基礎看護学実習Ⅱ
教師用評価表

学籍番号		担当教員	印				
学生氏名							
評価項目		評定 (○で囲む)					
総合評価		A	B	C	D	E	
I. 健康障害を持つ人の状況に応じ、基本的欲求充足への看護を理解する。 1. アセスメントする。 2. 問題・課題を明確にする。 3. 計画を立案する。 4. 実施する。		A	B	C	D		
II. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じて基本となる技術・日常生活行動の援助技術を安全・安楽に実施する。		A	B	C	D		
III. コミュニケーションの意義を理解する。 1. 相手のことを知りたい、理解したいと思う気持ちをもつ。 2. 対人関係において自分自身を知ることの必要性について気付く。 3. 相手の感じていることや考えていることを知ろうとする。 4. 自分が感じていることや考えていることを表現する。		A	B	C	D		
IV. 看護の目的・役割を理解する。 1. 知識と体験を結びつけ、看護の目的・役割を考える。 3. 看護者としての倫理観を養う。		A	B	C	D		
V. 学習方法を習得し、看護に活かす。 1. 計画的に学習する。 2. 問題解決型の学習をする。 3. 実習グループを育て、互いに高め合う。 4. 実習生としてのマナーを守る。		A	B	C	D		
総評							